

## 80 胆大小心の人の文学

いづれの御代の末にや、宰相参議の堂にて宣ぶなかに、大帝の御製「しきしまの大和心のを、しきはことある時ぞあらはれにける」を引く。この行ひ時に合はずと言ふ人ありて、かれこれ争論せしとぞ。初めの十一文字は国学学ぶてふ人々のしきりに歌ふ言の葉なれど、中にてこの道究めたる人の歌こそ名高かけれ。さりながら、胆大にして心こまやかなるこの翁、これを嗤ふて論じたことあり。— 此国には、日も月もここに生まれたまふと云いしなり。… ゾンガラスと云ふ千里鏡で見たれば、日は炎々たり、月は沸々たり。そんな物ではござらしやらぬ。ゐなか人のふところおやじの説も、又ゐなか者の聞ては信ずべし。京の者の聞くは、王様の不面目也。やまとだましひと云ふ事をとかくいふよ。どこの国でもその国のたましひが国の臭気なり。おのれが像の上に書しとぞ。「敷島のやまと心の道とへば朝日にてらす山ざくら花」とはいかにいかに。おのが像の上に、尊大のおや玉也。—

唐人蘭人朝鮮使わづかに来るのみの世にこそかかる論はあらめ。ちきゅうの上に万国の人々行き交ひする今の世に、いかにても和平を進めんことあらざるべからず。世の人このことを胆に銘じ、あまりにを、しきことは申さず、国々と心こまやかに交際つこうまつれかし…。

話のまくらに擬古文で時事問題を置いてみたが、とてもものに柳家小三治にはかなわない。ここから先は、胆大小心の人、上田秋成の文学に思いをめぐらせてみよう。

新しい年を迎えて読む書物を選ぶのに迷い、わずかにしか知らない江戸時代の小説を読んでみる気になった。取り寄せたのは『雨月物語』。これを読んでいなかったのは、その挿絵を目にしたことがあり、怪異小説という風聞を敬遠してのことだったと思う。適当な本を探すと、現代語訳の多くがやはり怪談風の装丁だった。世間での関心のもたれ方が好奇心からだと分かる。わたしは、『胆大小心録』を読んでいたので、作家上田秋成に関心をもっていたのだ。その岩波文庫版を取り出してみると、帯に「近世文学の鬼才上田秋成」と書いてある。「鬼才」という呼び方がいくらか負の印象を宿す。奥付がこの文庫本の初版はアジア太平洋戦争期の1938年に出たことを示すから、冒頭で見たような考え方をする秋成は、国学の勢力が増した明治以来、肩入れしすぎを警戒されるようになったのだろう。その見方は敗戦後も改まらず、1989年の第3刷のときにも、帯に「鬼才」と書かれることになったのだと思われる。

岩波文庫『雨月物語』を読んだら、その解説で校註者長島弘明が、晩年に執筆された『春雨物語』を、「秋成の代表作、否、江戸時代小説を代表する」と称揚していた。それを初めて知った浅学のわたしは、さっそく森田喜郎校註の『春雨物

語』を読んだ。こちらの解説が、『春雨物語』が『雨月物語』よりも話題になることが少ないわけを明かす。写本が知られていたものの、翻刻本が初めて出版されたのは遅く 1907 年だという。それも、本来の十篇のうち当時知られていた五篇にすぎず、貴重な「樊噲（はんかい）」は(上)だけであった。全十篇が出版されたのは敗戦後の 1951 年だそうだ。この書誌の事情が、上田秋成の小説の全体像が知られるようになったのはそれほど昔のことでないことを教える。文化の一変した戦後、文語文に親しむ人がめっきり減って、比較的少数の人々を除けば、広く秋成の小説の真価に気づく環境がなかったのではないだろうか。

先達に導かれて、わたしは『雨月物語』と『春雨物語』を読むことができた。しばしこれをふりかえって味わいなおしてみたいと思う。

『雨月物語』を読んで感心したのは、それが描写する怪異ではなく、文章の至るところに和漢の文学の素材が埋め込まれていることだった。長島弘明の解説は、「十代半ばまでは読み書きもできない放蕩無頼の生活だったが、十代後半から俳諧に手を染め、二十代から三十代にかけては、それに熱中するようになった」と書く。この記述はどうも自伝に基づくようだ。晩年の胆の太い人が若いころをふりかえってみて大げさに反省したものだろう。実際は、養父母に大切に育てら

れた人は相応の勉学をして知識を養っていた、と考えるべきだろう。そうでなくては、結婚した翌年養父が亡くなって店を継いだ二十八歳ころから、たやすく「小説を執筆するようになり、また和歌や国学を学ぶようになる」わけにいかなかっただろう。三十三歳で最初の小説を出版し、『雨月物語』の初稿を書き上げたのは三十五歳という。才能豊かな人だったことが判るが、『雨月物語』の紙背の厚みは、秋成の文学への取り組みが以前から並のものでなかったことを物語っている。岩波文庫本の数多い脚註が、秋成の読書量の多さを証言している。多読の範囲が広がったので、本居宣長の国学に論争を挑むこともできたのだろう。

小説を読むことの少ない老生の言うことをあまり信用してもらっては困るけれども、九篇の物語のいずれもが完成度の高い作品だと思う。原話があって物語に仕上げるのだが、巧みなプロットで登場人物を際立たせ、いくつかの出来事で肉づけして興味深い物語に構成していく手並み、既知の名文を取りこみながら織り上げられる文章の情緒、どれをとっても優れている。「菊花の約」は、怪異の形式のおかげで、太宰治の「走れメロス」よりも劇的でいさぎよい物語になっている、それは原話の手柄だろうけれども。わたしは、『雨月物語』を読んで、その怪談よりも文章が生む情緒に魅せられた。「浅茅が宿」にそれがあり、おどろおどろしいことを語る「蛇性の淫」でも、こまやかな文章がまといつく情緒を紡ぎ出す。挿絵などむしろ無用である。

ところが、短編集『雨月物語』は別種の物語や説話を含んで多様である。日本の歴史を素材にして、怨霊になるような悲運を味わった人物を採り上げる話がある。「白峰」では、天皇・上皇だったのに流されるという憂き目にあつた崇徳院の胸中を描いてみせる。その怨霊に西行が対決するという構想はおもしろく、よく整えられた構成に感心する。解説は、そこに国学・儒学・仏教に関する議論がからませてあると言う。豊臣秀次の怨霊が出てくる「仏法僧」では和歌を論じている、と。この短編集は秋成のエッセイ集でもあるのだ。

国学の師について学んだ秋成は、国学の流れをくむ。しかし、国学の考え方に閉じこもらない。「青頭巾」は「仏教と国学の境界を超えてしまう人物を描く」。大阪の商人の家に育った人はまた、「貧福論」で「国学・儒学・仏教とは違う非情の金銭の本性」を描いて見せている。一世代前の大阪には富永仲基という先学がいた。懐徳堂で儒学を学び万福寺で仏典を研究すると、若くして儒学・仏教・神道の特質を書物に著したが、鋭い批判精神が儒学者からも仏僧からも非難を受けた。そのいわば比較文化論は、中国・インド・日本それぞれの言説の特徴を、誇張する・空想する・隠すという言葉で表現している。富永仲基は病弱で早く亡くなったが、冒頭で引用した「どこの国でもその国のたましひが国の臭気なり」という言葉が、秋成がその比較文化論を知っていたことを明かす。本居宣長も富永仲基の仏教批判を評価したらしいが、

それは、国粹的な立場からのことだった。富永仲基と同じく商都大阪で育った上田秋成の方が、その批判精神を受け継いでいたのである。

けれども、そういうことよりも、上田秋成をまず作家として評価することが重要である。怪異の側面が注目されがちだが、作家秋成は、小説という言葉を生んだ中国の唐・宋以来の伝奇を正統に受け継ぎ、平安時代以来の日本の物語を融合して、日本の読者に向けて書いたのである。そして、奇譚を、人間を描く豊かな小説に進化させたのである。ところが、先ほど推測したように、ある程度の知識を要求し古い語り方をとり入れた文体が、広い読者の獲得をむずかしくしたのだと思われる。それが今も続いているのだろう。

『春雨物語』は、版本の普及が遅れたせいもあって、その受容がいつそうおろそかであるように見える。今ごろになって読んだわたしも、『春雨物語』に『雨月物語』に勝る秀作があるという識者の評価が本当だと知り、『春雨物語』のよさがもっと話題にされるべきだと思った。というわけで、こんどは『春雨物語』に目を移そう。

晩年に書かれた『春雨物語』は『雨月物語』の変奏曲と言うことができる。『春雨物語』の十篇もいくつかの類型に分けることができる。校註者の森田喜郎は、十篇それぞれの内容について、一篇が二つの特徴をもつことを許したうえで、

①～⑤の五類型の特徴づけをしている。

この理論的な分類で森田は、たとえば、「血かたびら」・「天津乙女」・「二世の縁」を、②儒教・仏教批判を主にした物語として、「外来思想への批判が『雨月』よりも徹底し、すすんだもので、『雨月』以上の作品になっている」と考える。だが、わたしはこの判定に賛成しかねる。前の二篇は、秋成の関心が天皇位の継承にかかわる政変にあることを示すが、平らかな語り「白峰」にあった緊張ある構成を失わせ、物語としておもしろくない、と思う。仏教批判に当たる小説「二世の縁」は、「青頭巾」の人間的迫力に敵わない。むしろ、これら三篇には『雨月物語』にあった多価値を認める姿勢が乏しく、「批判」と呼ぶにふさわしい思想の柔軟性に欠ける。現代の視点から見れば、これは時代の制約によるだろう。江戸時代の日本には啓蒙の運動が興る条件が不足し、富永仲基の提出した比較文化論も発展しなかった。②に分類された物語は、日本とそこに生きた秋成の思想の弱点を露呈している、と現代の老生は思う。

③知識的言説を主にした物語について、「『春雨』に至って、知識が何らはばかりことなく、生のままで展開されて、…、文学として『雨月』よりもすすんだもの」という評価は部分的に同意できる。しかし、「天津乙女」や「目ひとつの神」が知識的言説としても物語としてもそれほど秀作とは思わない。「歌のほまれ」はエッセイとしても断片的すぎる。

七十四歳のとき、「名もとめて何せん。ただ好きたることいひたきこと筆にいはせてのち、かいやりてむ」と、庭の古井戸に投げすてた八十部ばかりの原稿の中にこそ惜しむべき作品があったはず。死期が近づいたころに編まれた『春雨物語』全篇を十全の作と見なしては誤るだろう。

④愛がふみにじられていく物語「宮木が塚」と「死首の咲顔」が、文学として『雨月』よりもすぐれているという評価に賛成する。わたしをその小説の世界に引き入れたのは練達の文体である。文体がこまやかな人間の描写を可能にするのだと思う。

人間描写という点で筆頭に挙げられるのは、①登場人物の性格が中心になって展開されている物語、「樊噲」・「捨石丸」と「血かたびら」である。校註者森田喜郎は、①が「時代にさきがけた」すぐれた手法で、「我が国の小説では、近代になって西欧の小説から学んで、初めて知る方法であった。『春雨』ははるか近代と呼応している小説である」とする。「血かたびら」の代わりに「宮木が塚」が①に含まれていたら、わたしはこの評価をさらに歓迎しただろう。

以上のことをわたしなりに整理してみると、『春雨物語』の成功の要因は、歳を重ねた秋成が人間をより深く知ったこと、そして、前にはあった語り方の枠をはずしてのびやかに文章をつづることで、人間の描写が精妙になったことにある

と思う。語りの巧みさが緩みのないストーリーを展開させ、情景と人物の行動との精彩ある記述が人物の性格を浮かびあがらせるのである。そうして、新しい小説ができたのだ。わたしは、「宮木が塚」がつくりだす情緒に浸り、最も文章量の多い「樊噲」を物語がどのように展開するのか期待しながら読み進んだ。構成がしっかりして人間を生き生き描いておもしろい「樊噲」は、『春雨物語』の頂点にある。舞台もそれを描く文章も古いけれどたしかに近代的な小説に近い、と思った。

こういうおもしろい小説として、一瞬、読んだことのあるスタンダールやバルザックの作品を思い浮かべたけれど、十九世紀に入ってフランスで生み出された作品はバラエティも内容も豊富である。西洋との対比は単純ではない。「樊噲」を称賛するのに、西洋の近代小説をうかつに引き合いに出すと勇み足になるだろう。

2019年3月春分

---

この蝶の雑記帳に気づく人たれもが、いつも分不相応なること書き散らすを、さぞかしにがにがしく思召したまふらむ。なにぶんにも、七十四歳の老いたる蝶の「ただ好きたることいひたきこと筆にいはせて」命長らへるえくささいずと思ひなして、お見逃し給へ。